

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02848

研究課題名(和文) 初級文法導入のためのビデオ教材の作成とそれを使用する能力養成に関する研究

研究課題名(英文) The Study on the E-Learning System for Introducing Basic Japanese Grammar and the Teachers' Development

研究代表者

河野 俊之 (Kawano, Toshiyuki)

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：60269769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：多様な学習者のレディネス，ニーズに対応するため，初級文法項目の導入方法およびそのためのeラーニング教材の開発を行った。アクティブ・ラーニングに対応するため，複数の絵を示し，学習者に文法項目の用法を推測させ，学習者と教師や，学習者同士でやり取りを行いながら，用法を理解していく方法を試みた。その結果，学習者は文法項目の用法を自律的に推測できるようになった。また，本教材を日本語教育実習で用いることで，本教材の有効性が明らかになり，実習生はアクティブ・ラーニングについてより深く考えるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の初級文法教育における説明では媒介語を用いるか否かに関わらず，一方的なものが多い。それでは，協働学習になっておらず，媒介語を用いた文法解説を事前に読んでおけばよいのではないかと考えられる。また，教室外では未習の学習項目に接することはごく自然であり，その際に自律的に推測する能力を養成することが重要である。本研究は，自律学習，協働学習を初級文法教育に取り入れたことに大きな意義がある。また，日本語学習者の自律学習，協働学習のために，日本語教師はどのような支援を行うべきかについて，教師養成において行ったことも大きな意義である。

研究成果の概要(英文)：The e-learning system for introducing basic Japanese grammars to the learners of Japanese following the concept of active-learning was developed so that learners can understand the basic grammar items by guessing their usage based on multiple pictures and also by talking with peer learners and teachers. It was found that the system promotes learners' active leaning on Japanese basic grammars.

By using this system in the Japanese practical training, the effectiveness was clarified, and the student teachers could think more about active-learning.

研究分野：日本語教育

キーワード：初級文法 教師養成 自律学習 協働学習 媒介語

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語教育において、教師から学習者へという一方的な活動の時間はできるだけ短くし、学習者同士の活動を増やすべきであることは、かなり以前から唱えられている。例えば、プロジェクトワークなど、協働で1つのものを作り上げるものや、ピアレスポンス、ピアリーディングなど、協働しながら各自で作るものもある。初級でも、ロールプレイなど様々な工夫が行われており、ドリルでも、チェーンドリルなど、学習者から学習者へという流れを取り入れている。一方、文法説明では、学習者を巻き込んだ工夫はあるものの、基本的には一方的なものが多い。また、媒介語で書かれた文法解説書は多く、それを個人で読めば文法説明は必要ないという考えもある。

また、数多く出版されている教師用指導書を見ると、初級文法項目の導入方法に関する記述のみのものが多く、特に、実習生を含めた経験の浅い日本語教師の関心は、初級文法項目の導入に集中しているように思われる。しかし、研究代表者の経験では、実習生の問題点は、文法導入よりもそれ以降の活動に問題があることが多いことから、日本語教育活動をもっと俯瞰的に広くとらえさせたいと考えている。

### 2. 研究の目的

一方的な活動はできるだけ短くし、自律学習や協働学習を増やすことを初級文法の導入にもとりいれるためにはどうすればいいかを考え、そのための教材を作成すること、さらに、それを実習生を含めた経験の浅い日本語教師、さらに様々な教師がより有効に活用できるようにすることを目的とした。また、さらに、それによって、教師が自律学習や協働学習についてより深く考え、実践できるようになることも目的とした。

### 3. 研究の方法

まず、河野俊之(2014)('母語が多様な学習者を対象に英語を媒介語として用いた初級日本語授業: 一方的でない文法説明の試み'『イマ×ココ』2, ココ出版.)に記載されている実践を実現するための教材作成を行った。

まず、扱うべき文法項目を、市販の成人用日本語初級教科書や教師用指導書から抽出した。また、外国につながる子どもに対する初期日本語指導の授業を見学し、ニーズを探った。そこでは、絵などを用いて、直接法で行うことが多いが、子どもが必ずしも理解できてはいないようであることなどが分かった。

次に、上で抽出した文法項目について、文法項目の導入における問題点を明らかにした。すなわち、絵が用法を推測できないことがある、例文が実際の場面であり用いないものである、などである。これらをもとに、新しい文法項目をわかりやすく、ストレスを与えずに理解させる、あるいは、逆に、より自然な状況を提示し、新しい文法項目の用法について、学習者がいろいろ推測するといった、目的に応じた例文や状況を考えて。さらに、上の例文や状況に対応するイラストを作成し、教材を作成した。

### 4. 研究成果

各文法項目について4つの絵を作成し、それを用いて、パワーポイントで作成した。



研究代表者が日本語授業内で、試用した。頭での媒介語は英語のみである。まず、4つのイラストを同時に示し、共通点について、学習者が推測し、グループになって、その推測について確認し合った。やり取りをした後、共通点や当該文法項目の用法に当てはまる英語をパワーポイント

トに示した。さらに、その後、各例文について、英語及び日本語で示した。これらにより、従来行っていた、英語による文法説明を、教師から学習者への一方的な説明あるいは教師主体の説明で進めるよりも、推測を促すのに適した絵だけを提示し、学習者に推測させることで、自律学習に役立ち、時間の節約になることや絵だけで理解できても、教師による説明によって学習者が確信を持つことにつながることで、学習者の推測する能力が高まること等が分かった。このような未知の文法項目について推測する方法は自然習得で行われているが、教室学習でもそれを行うことで、自律学習の能力が向上し、教室外で未習の日本語に接した際にも推測するようになったことが授業アンケートからも明らかになった。

研究代表者のほか、協力者にも試用していただき、教材の改善を行った。学習者の推測がうまくいかない絵については作成しなおした。また、学習者の推測した共通点として提示する英語の単語や文についても、学習者の実際の推測に基づいて、必要に応じて入れ替えを行った。

さらに、用法を推測、確認し、例文を示した後に関して、2つの追加を行った。まず、フォームの練習問題を追加した。例えば、「～てしまいました」では、「する してしまいました」「忘れる 忘れてしまいました」等である。これはロコケーション研究の成果に基づき、よく使われる動詞などを用いた。また、用法を推測する4つの絵だけでなく、各文法項目について新たに4つの絵を作成し、その用法やフォームを確認することができるようにした。これにより、さらに有効な教材となった。

上の追加を行うことにより、流れとしては、独学が可能となったが、パワーポイントのままでは独学がしにくいと考えた。そこで、スマートフォンで、学習者が独学することもできるように、電子教材作成ツール Finger Board を用いて、教材を作成した。

現在は、より使いやすくするために、既製の電子教材作成ツールではなく、web上に教材を作成し、それをスマートフォン、タブレットで使えるように準備している。また、既に準備した英語だけでなく、日本国内で学習者が多いベトナム語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、インドネシア語も示せるように、現在、翻訳を進め、例文、フォームの練習問題についてはモデル音声が出るように作成中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 河野俊之	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 初級文法導入及び練習のためのeラーニング教材	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.19022/jlem.25.1_76">https://doi.org/10.19022/jlem.25.1_76</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 初級文法導入及び練習のためのeラーニング教材
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 「一人前」の日本語教師はどうやって育つものか
3. 学会等名 日本語教育振興協会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 教えよう 日本語～「先生が先生でよかったです！」と言われたい～
3. 学会等名 凡人社（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 日本国外での日本語教育において考えたいこと
3. 学会等名 生駒言語学院（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 教育学部 日本語教育専門領域説明会
3. 学会等名 横浜国立大学
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 教科書の会話の教え方
3. 学会等名 ダナン大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野俊之
2. 発表標題 『教えよう 日本語』～「先生が先生で良かったです！」と言われたい～
3. 学会等名 凡人社（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----